

老年期の心理社会的発達に関する研究 — SCT による検討 —

Psychosocial Development in Late Life :
An Examination by means of Sentence Completion Test for the Elderly

星野 和実

【要約】 The purposes of this study were (1) to make a Sentence Completion Test for the Elderly(SCT-E) , (2) to clarify their psychosocial development in late life, and (3) to examine relations between psychosocial development and subjective well-being. The subjects were 264 elderly persons at home(176 men and 88 women, mean age:69.82 years old). SCT-E was constructed by eight related conceptions of psychosocial development:① attitudes to life, ② attitudes to death, ③ time perspectives, ④ generativity, ⑤ wisdom, ⑥ faith, ⑦ commitments to society, and ⑧ body consciousness.

As a result, the elderly of more than 70 years old were more positive than the younger older persons(65~69 years old) in estimating their vocational life in attitudes to life. Making comparisons between men and women, men were significantly more positive than women in estimating their marriage life in attitudes to life. But women were significantly more positive than men in estimating their friendships in commitments to society and their time perspectives to the past.

Subjective well-being was measured by the Philadelphia Geriatric Center Morale Scale(PGC). Subjects were divided into two groups by the median of total PGC score. The high score group of PGC was significantly more positive than the low score group of PGC in attitudes to death, time perspectives, generativity, commitments to society, and body consciousness.

【キーワード】 Psychosocial development, Elderly, Sentence Completion Test

I 問題と目的

超高齢社会を迎える現代において、高齢者は平均寿命の伸長とともに長期化した老年期の生き方を問われている。Erikson(1950,1959,1964,1982)¹⁾²⁾³⁾⁴⁾は人間を生涯に渡って発達する存在と見做し、個体発達分化の図式を提示した。人生には8つの発達段階があり、それぞれに特有の心理社会的危機を設定した。ここで危機とは分岐点という意味であり、従来の心的体制が新しく再体制化される決定的なときである。心理社会

的危機は対の概念で表され、発達にとって同調的傾向と非同調的傾向からなり、両者の力の均衡状態を示すという。

老年期の心理社会的危機は「統合 対 絶望」である。“身体的な限界に加えて…(中略)…今はもう変えられない過去と、未だ知ることのできない未来を受け入れ、起こりがちな失敗や手抜かりは認め、必然的に起こる絶望感と、生き続けるのに欠かせない全体的な統合との感覚との間にバランスをとろうと苦闘している自分を発見する。” “…現在生きている世代の中でうまく

釣り合う位置に自分を置き、無限の歴史的連続の中での自分を受け入れるという、課題に直面する” (Erikson, Erikson, & Kivnick, 1986, Pp.59).⁵⁾ 老年期は成功も失敗も含めて人生をかけたがえのないものとして受けとめることが求められ、それが限りある生を積極的に捉えるとともに、死をも受容することにつながる。

こうした老年期の心理社会的危機と、過去・現在・未来に対する時間的展望は密接に関連しており、その際に異なる世代との相互的な交流の重要性が指摘されている。高齢者が若い世代とかかわったり経験を伝え合うことによって、過去の自己を再評価したり、以前の発達段階における未解決の問題に再度取り組むことができる。未来に対しては生命が死してもなお、自己の価値観や精神が次の世代に引き継がれるという世代継承の信頼をもつことができる。これらが高齢者の人生と死に対する態度に肯定的に寄与するとされている。

以上のような課題は身体的、精神的老化や職業上の引退を経つつ、それぞれの個人が特有のあり方で、社会における現実的なかかわりを定位しながら行われる。また、自己の経験から独自の信念を醸成してそれを信じることのできる態度が必要とされる一方で、他者の異なる信念も取り入れ咀嚼することのできる柔軟な価値体系が求められる。

上記の Erikson の心理社会的発達論をまとめ、Bühler (1968)⁶⁾、Jung (1969)⁷⁾、Gould (1972)⁸⁾、Levinson (1978)⁹⁾、Neugarten (1968)¹⁰⁾、Calson (1984)¹¹⁾、Santrock (1985)¹²⁾、岡本 (1985)¹³⁾、堀内 (1993)¹⁴⁾ も参照して、老年期の心理社会的発達に関連する概念を挙げた。すなわち①人生に対する態度、②死に対する態度、③時間的展望、④世代性、⑤知恵、⑥信仰、⑦社会への関与、⑧身体意識である(表1)。

①人生に対する態度と②死に対する態度は、「統合対 絶望」に直接関連する主題である。③時間的展望と④世代性は、個人内及び個人間のライフ・サイクルを表す。⑤知恵は生涯で培ってきた個人の価値観や信念であり、⑥信仰はそれらを信じる態度や、宗教に対する態度を内包する。⑦社会への関与と⑧身体意識は社会的コミットメント及び、老化や健康に対する意識である。老年期の心理社会的危機である①、②に対して③から⑧が関与すると考えられる。

ところで、老年期の心理社会的発達に関する研究は

面接法の他、質問紙や文章完成法 (Sentence Completion Test:以下SCTと記す)により主に積み重ねられてきた。質問紙の代表的なものとして、Domino & Hannah (1989)¹⁵⁾、Domino & Affonso (1990)¹⁶⁾は、乳児期から老年期までの心理社会的発達を評価する Inventory of Psychosocial Balance (IPB)を作成した。IPBと California Psychological Inventory(Gough, 1960:CPI)¹⁷⁾・Social Maturity Index及び、IPBとCPI・Self-Realization Scale で、それぞれ有意な正の尺度間相関を見出した。心理社会的発達のバランスは、社会的成熟度や自己実現傾向と関連するとされた。

SCTと面接法を組み合わせた研究として、Beaton(1991)¹⁸⁾はSCT (Washington University Sentence Completion Test for Ego Development, Fallot, 1979-1980:WUSCTED)¹⁹⁾により自我発達のレベルを測定し、ライフ・レビューにおける回想のスタイル(肯定型、否定型、絶望型)との関連を検討した。肯定型は非肯定型(否定型、絶望型)に比してSCT得点が有意に高く、自我発達レベルの高さが示された。

SCTの利点として特筆されることは、質問紙に比して対象者に比較的自由的な回答が委ねられるため、高齢者の多様な価値観や、肯定と否定を含んだ多層の言語表現を測定可能な点である。成人期及び老年期に焦点をあてたSCTに関する代表的な研究では、下仲 (1988)²⁰⁾が高齢者の自己概念をSCTにより評価した。過去、現在、未来の自己や家族、友人関係における自己に加えて、死生観や加齢観まで多面的なアプローチは意義深い。高齢者の対社会的な自己の位置づけや、ライフ・サイクルという発達の視点を考慮する必要があると思われる。また、岡本・山本(1985)²¹⁾はEriksonの心理社会的発達課題を測定する自我同一性SCTを作成した。これは乳児期から老年期までの発達を網羅しており有用であるが、老年期については人生や死に対する態度や仕事の評価という内容に留まっている。

以上のように、老年期の心理社会的発達を評価するには人生や死への態度を明らかにすることはもちろんであるが、時間的展望や世代性も併せて取り上げる必要がある。また、高齢者の身体意識や社会との関与も含めて、総合的に検討する必要があるが、こうした視点から老年期の心理社会的発達を評価するSCTは未開拓であると考えられる。

表1 老年期の心理社会的発達における関連概念

関連概念	定義	SCT-E 項目
①人生に対する態度	自分の人生の成功も失敗も受けとめ、1回限りのかけがえのない人生であったと見なしている。また生涯発達を評価し、自分なりの意味づけをしている。	4, 5, 19, 22
②死に対する態度	死をいつか自分にも訪れるものとして認識しており、人生の必然的な帰結として受けとめている。また、死を考えることで、余生をより豊かに捉えている。	12, 18, 24
③時間的展望	過去から現在、さらに未来に至る一貫した時間感覚をもち、加齢を自覚するとともに、人生の有限性を認識している。	7, 8, 9, 20
④世代性	次の世代を育てることや子や孫の成長や教育に対して積極的な関心をもっている。若い世代に対して信頼感を持ち、自分が死んでも精神や価値観が受け継がれる感覚を有する。また、自分の生命は両親や先祖を含めて、歴史的に引き継いだものであるという認識がある。	3, 11, 14, 16, 17
⑤知恵	一生の中で多様な経験から学んだ深い知識や判断からくる知恵をもっている。また、自分なりの価値観を形成している。	10, 21
⑥信仰	宗教的なものや精神的なものを信頼し、それらに対する自分なりの態度を確立している。自分が傾倒する価値観や思想などに希望をもって関与している。	23, 25
⑦社会への関与	仕事、趣味、友人関係等の社会とのかかわりに対して、自分なりのコミットの方法が確立しており、それに満足感をもっている。社会に対する自己の位置づけを認識している。	2, 13, 15
⑧身体意識	自分の身体状態を適正に意識しており、健康に対する関心も適切にもっている。	1, 6

表2 対象者のプロフィール (N)

性別	家族構成	教育歴	過去の職業	現在の職業						
男性	176	独居	48	小卒	3	無職	26	無職	231	
女性	88	夫婦2人世帯	128	中卒	36	有職	238	有職	33	
		三世代家族	49	高卒	145	製造業	44			
		その他	39	大卒	79		非製造業	157		
				不明	1		不明	37		

さらに人生と死の受容には、現在の心理的適応が重要であると考えられる。下仲・河合・中里・長田(1992)²²⁾は、心理的適応を自尊感情、抑うつ感情等から見て、これらと自我の統合の関連を検討した。その結果、自我の統合が達成されている者ほど、自尊感情が高く、抑うつ感情が低いことが認められた。岡本(1995)²³⁾は、生活満足度尺度(Life Satisfaction Index-A:Neugarten, Havighurst, & Tobin,1961:LSI-A)²⁴⁾を参考にして、①日常生活・活動の充実感、②人生の意義の認識・自分の人生の受容、③自分の人生の目標の達成感、④肯定的な自己像、⑤肯定的な将来展望・楽天的な態度を内包する精神的充足感を測定する尺度を作成した。精神的充足感は、健康や経済状態等生活の諸側面に対する満足度が高い高齢者で、また主体的欲求を有する者で有意に高かった。このように、人生と死の受容には現在、肯定的な自己像を有するとともに、不安や抑うつ感が低く情緒的に安定していることが必要であると考えられる。また身体的にも社会的にも生活に対して主観的な満足感をもつことが関与する。

以上の文献展望を踏まえて、本研究においては、①老年期の心理社会的発達を評価するSCTを新たに作成し、②時間的展望、世代性も含めて、高齢者の人生や死に対する態度を明らかにするとともに、③現在の心理的適応との関連を検討することを目的とする。

II 方法

1. 調査対象者及び調査手続き

調査対象は、中部地方の政令指定都市であるA市の高年大学及び生涯教育センターで学ぶ65歳以上の在宅高齢者である。調査は1995年12月に筆者が講座時間に配布し持ち帰り調査とした。有効回答数は264名(男性176名、女性88名、平均年齢69.82歳)であった(表2)。対象者の中で、配偶者のある者は199名、配偶者のない者は65名(このうち死別47名)であった。居住形態は独居48名、夫婦2人世帯128名、3世代同居49名、その他39名であった。過去の職業は有職238名、無職26名であり、有職者の職種は製造業44名、非製造業157名、不明(未回答)37名であった。現在の職業は有職33名、無職231名であった。教育歴は小卒3名、中卒36名、高卒145名、大卒79名、不明1名であった。

以下に示すSCTの他に、老年期の心理的適応を評価する目的でPGCモラル・スケール(Lawton,1975)²⁵⁾を実施した。PGCモラル・スケールは主観的幸福感を測定し、①心理的安定性、②老いに対する態度、③孤独・不満感の下位尺度から構成され、現在の情緒状態や加齢の評価を知ることができる点で有用である。他に对人的ネットワーク、健康状態、趣味等も尋ねた。

2. 測定尺度の作成

Eriksonによる老年期の心理社会的発達を測定する目的でSCTを作成した(Sentence Completion Test for the Elderly:以下SCT-Eと記す)。下仲(1988)²⁰⁾等を参考にして、上述の関連概念に2~5項目、計30項目のSCTを作成した。在宅高齢者10名に予備調査を実施した後、心理学研究者2名と項目内容の適切さを協議し、25項目のSCT-Eを作成した(表3)。

3. 回答の評定と整理

回答は各項目ごとに整理し、他項目の内容に依らず評定することとした。Gruen(1964)²⁶⁾、岡本・山本(1985)²¹⁾等を参考に評定基準を作成し、それに従って項目を肯定、中立、否定に評定し、それぞれ3~1点を与えた。また項目によっては必要に応じて、内容の下位分類を行った。3段階の評定は2名の評定者(そのうち1名は筆者)が実施し、評定者間の信頼性(Ebelの公式)は.79~.96であった。

III 結果

1. 年齢及び性による比較

1) 年齢による比較

最初に年齢の中央値で60歳代と70歳以上に二分し、年齢による χ^2 検定を行った(表4)。その結果、有意差の見られた項目は、「22.私の人生で仕事は」($\chi^2=6.31$, $df=2$, $p.<.05$)であった。有意な傾向が見られた項目は、「14.子どもや若い人を育てることは」($\chi^2=4.80$, $df=2$, $p.<.1$)であった。

2) 性による比較

次に性別により χ^2 検定を行った(表5)。その結果、有意差の見られた項目は、「4.私の人生で、結婚は」($\chi^2=12.81$, $df=2$, $p.<.01$)、「19.私の夫(妻)は」($\chi^2=15.50$, $df=2$, $p.<.001$)、「2.友だちづきあいは」($\chi^2=20.80$, $df=2$, $p.<.001$)、「20.よく思い出すのは」($\chi^2=8.61$, $df=2$, $p.<.05$)であった。傾向差の見ら

表3 老年期の心理社会的発達を評価するSCT (SCT-E) の項目

1. 私のからだは	2. 友だちづきあいは	3. 私にとって、子どもは
4. 私の人生で、結婚は	5. 一生をふりかえると	6. 私にとって、健康は
7. 年をとるにつれて	8. 65歳をすぎたら	9. これからは
10. 私の人生観は	11. 私にとって、孫は	12. 人は死んだら
13. 私は社会の中で	14. 子どもや若い人を育てることは	15. 私の生きがいは
16. 私は、両親やご先祖様から	17. 歴史の中で、私の人生は	18. 私は死を考えると
19. 私の夫(妻)は	20. よく思い出すのは	21. 人生で学んだことは
22. 私の人生で、仕事は	23. 私にとって、宗教は	24. 私が心配に思うのは
25. 私が信じるものは		

表4 年代による比較

関連概念	①人生に対する態度		④世代性	
項目	22. 私の人生で、仕事は		14. 子どもや若い人を育てることは	
年代	65～69歳	70歳～	65～69歳	70歳～
肯定	62	70	70	44
中立	67	46	45	52
否定	13	5	27	24
χ^2 検定	df=2, $\chi^2=6.31^*$		df=2, $\chi^2=4.80^+$	

***p.<.001 **p.<.01 *p.<.05 +p.<.1

注) 有意差の見られた項目のみ記した。

表5-1 性別による比較

関連概念	①人生に対する態度		③時間的展望			
項目	4. 私の人生で結婚は		19. 私の夫(妻)は		20. よく思い出すのは	
性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性
肯定	102	33	115	34	19	21
中立	60	37	51	37	80	36
否定	11	15	7	10	70	26
χ^2 検定	df=2, $\chi^2=12.81^{**}$		df=2, $\chi^2=15.50^{***}$		df=2, $\chi^2=8.61^*$	

***p.<.001 **p.<.01 *p.<.05 +p.<.1

注) 有意差の見られた項目のみ記した。

表5-2 性別による比較

関連概念	④世代性		⑤社会への関与	
項目	14. 子どもや若い人を育てることは		2. 友だちづきあいは	
性別	男性	女性	男性	女性
肯定	82	32	95	72
中立	66	31	51	13
否定	27	24	30	3
χ^2 検定	df=2, $\chi^2=5.84^+$		df=2, $\chi^2=20.80^{***}$	

***p.<.001 **p.<.01 *p.<.05 +p.<.1

注) 有意差の見られた項目のみ記した。

表6-1 主な項目の内容分析

関連概念	①人生に対する態度		②死に対する態度		③時間的展望	
項目	5. 一生をふりかえると		18. 私は死を考えると		7. 年をとるにつれて	
評定	内容	(N)	内容	(N)	内容	(N)
肯定	1. 過去経験の肯定	54	1. 積極的受容	22	1. 性格の肯定的変化	25
	2. 実績への満足感	20	2. 消極的受容	19	2. 目標のある生き方	21
	3. 後悔の否定	9	3. 余生の再考	18	3. 健康への関心	20
	4. 外界への感謝	6	4. 死に方の願望	16	4. 人生の再考	9
	5. 現在の幸福感	2			5. 対人関係の変化	6
					6. その他	12
	計	91		75		93
否定	1. 否定的評価	23	1. 否定的感情	31	1. 身体的老化、病気	51
	2. 再挑戦の願望	5	2. 死の回避、否定	20	2. 精神的老化	30
	3. 受動的選択の後悔	3	3. 恐怖	17	3. 性格の否定的変化	13
	4. 過去経験の否定	1	4. 後悔, やり残したこと	10	4. 時間感覚の変化	5
				4	5. 孤独感	5
			5. その他		6. 不安	5
					7. 限界感	4
					8. その他	5
	計	32		82		118
中立		140		80		51
欠損値		1		27		2

表6-2 主な項目の内容分析

関連概念	④世代性		⑤知恵		⑥信仰	
項目	14. 子どもや若い人を育てることは		10. 私の人生観は		23. 私にとって宗教は	
評定	内容	(N)	内容	(N)	内容	(N)
肯定	1. 肯定的評価	36	1. 肯定的人生観	117	1. 心理的支え	44
	2. 養育の重要性	35	2. 肯定的将来展望	22	2. 肯定的評価	25
	3. 社会的継承の認識	18	3. 肯定的人生回顧	21	3. やすらぎ・安心感	17
	4. 伝承・相互教育	10	4. 人智を超えたもの	6	4. 人間的成長	11
	5. 生きがい	7	の認識		5. 信仰の実践	8
	6. その他	8			6. その他	5
	計	114		166		110
否定	1. 否定的評価	43	1. 否定的人生回顧	4	1. 関心の希薄さ	14
	2. 時代の相違	6	2. 否定的将来展望	3	2. 関与しない	14
	3. 関与しない	2	3. 後悔	3	3. 否定的評価	11
			4. 見つからない	2	4. 不信	10
	計	51		12		49
中立		97		70		90
欠損値		2		16		15

表6-3 主な項目の内容分析

関連概念	⑦ 社会への関与		⑧ 身体意識	
項目	13. 私は社会の中で		1. わたしのからだは	
評定	内 容	(N)	内 容	(N)
肯 定	1. 社会参加への関心	48	1. 健康	105
	2. 人生の肯定的評価	25	2. 親, 神からの授かりもの	13
	3. 社会における自己の認識	20	3. 若さの強調	8
	4. 将来展望	16	4. 健康管理への関心	6
	5. 社会奉仕への関心	13	5. 誇り・自信	5
	6. その他	9		
	計	131		137
否 定	1. 有用感の欠如	10	1. 病気・けが	20
	2. 存在感の希薄さ	9	2. 不健康	18
	3. 社会参加の否定	4	3. 老化	8
	4. その他	4	4. 肥満	4
	計	27		50
中 立		103		77
欠 損 値		3		0

表7-1 PGCモラル・スケール得点群による比較

関連概念	① 人生に対する態度				② 死に対する態度			
項目	4. 私の人生で結婚は		19. 私の夫(妻)は		20. 私の人生で仕事は		18. 私は死を考えると	
P G C	~11点	12点~	~11点	12点~	~11点	12点~	~11点	12点~
肯 定	58	77	69	80	58	74	32	43
中 立	54	43	46	42	63	50	36	44
否 定	18	8	13	4	12	6	52	30
χ^2 検定	df=2, $\chi^2=7.75^*$		df=2, $\chi^2=5.74^+$		df=2, $\chi^2=5.40^+$		df=2, $\chi^2=8.28^*$	
	***P.<.001		**P.<.01		*P.<.05		+P.<.1	

注) 有意差の見られた項目のみ記した。

表7-2 PGCモラル・スケール得点群による比較

関連概念	③ 時間的展望				④ 世代性	
項目	7. 年をとるにつれて		8. 65歳をすぎたら		17. 歴史の中で、私の人生は	
P G C	~11点	12点~	~11点~	12点~	~11点	12点~
肯 定	37	56	70	76	10	24
中 立	21	30	31	38	56	69
否 定	75	43	27	14	55	27
χ^2 検定	df=2, $\chi^2=14.09^{***}$		df=2, $\chi^2=5.08^+$		df=2, $\chi^2=16.67^{***}$	
	***P.<.001		*P.<.05		+P.<.1	

注) 有意差の見られた項目のみ記した。

表7-3 PGCモラル・スケール得点群による比較

関連概念	⑦ 社会への関与				④ 身体意識	
項目	2. 友達づきあい		13. 私は社会の中で		1. わたしのからだは	
P G C	~11点~	12点~	~11点	12点~	~11点	12点~
肯 定	80	87	60	71	57	80
中 立	30	34	51	52	43	34
否 定	24	9	21	6	34	16
χ^2 検定	df=2, $\chi^2=7.30^*$		df=2, $\chi^2=9.23^{**}$		df=2, $\chi^2=11.34^{**}$	
	***P.<.001		*P.<.05		+P.<.1	

注) 有意差の見られた項目のみ記した。

れた項目は「14.子どもや若い人を育てることは」($\chi^2=5.84$, $df=2$, $p.<.1$), であった。

2. 内容分析

ここでは、老年期の心理社会的発達に関連概念で、主な項目について内容分析を行った(表6)。ただし、重複回答も含むため、合計は対象者数を超過する。

①人生に対する態度では、項目「5.一生をふりかえると」を見ると、肯定的な態度(91名)として、過去経験の受容(54名)、実績への満足感(20名)、現在の幸福感(2名)等が挙げられる。否定的な態度(32名)では苦勞等の否定的評価(23名)、再挑戦の願望(5名)や受動的選択の後悔(3名)等が見られた。

②死に対する態度では、「18.私は死を考えると」で肯定的な態度(75名)として、積極的受容(22名)、消極的受容(19名)等が認められた。否定的な態度(82名)では、否定的感情・意味づけ(31名)、死の回避・否定(20名)、恐怖(17名)等がうかがえた。

③時間的展望では、「7.年をとるにつれて」で肯定的変化(93名)として、性格の肯定的変化(25名)、目標のある生き方(21名)、健康への関心(20名)の他、人生や生き方の再考(9名)等も見られた。否定的変化(118名)は、身体的老化(51名)、精神的老化(30名)の他、時間感覚の変化(5名)、能力の限界感(4名)等が挙げられた。

④世代性では、「14.子どもや若い人を育てることは」を見ると、世代性に対する肯定的態度(114名)として、養育の肯定的評価(36名)、養育の重要性(35名)、社会的継承の認識(18名)等がうかがえた。

⑤知恵では「10.私の人生観は」で、肯定的な人生観(117名)、将来展望(22名)、人智を超えたものの認識(6名)等肯定的態度が見られた(166名)。

⑥信仰では、「25.私にとって宗教は」で、宗教に対する肯定的態度(110名)として、心理的支え(44名)、宗教への肯定的評価(25名)、安らぎ・安心感(17名)、人間的成長(11名)等が見られた。一方、否定的態度(49名)として、関心の希薄さ(14名)、関与しない(14名)、不信(10名)等が挙げられた。

⑦社会への関与では、「13.私は社会の中で」において肯定的態度(131名)として、社会参加への関心(48名)、社会における自己の肯定的評価(20名)、社会奉仕への関心(13名)等が認められた。

⑧身体意識では、「1.わたしのからだは」を見ると、

肯定的態度(137名)として健康(105名)、若さの強調(8名)、誇り・自信(5名)等が見られた。

3. PGCモラル・スケールとの関連

1) PGCモラル・スケールの因子分析

主観的幸福感と老年期の心理社会的発達の関係を検討するために、PGCモラル・スケールとの関連を分析した。最初にPGCモラル・スケールの因子分析(主成分分解—バリマックス回転)を行ったところ、2因子を抽出した。因子負荷量=.30以上の項目から下位尺度を構成し、尺度構成を行った。ただし2因子に渡って高い因子負荷量の見られたものは、項目内容から分類した。その結果、各尺度の信頼性係数(Cronbachの α 係数)は.63~.66であり、信頼性が確認された。

下位尺度は①[加齢に対する態度]と②[心理的安定]を構成した。①[加齢に対する態度]は、「9.あなたは若いときと同じように幸福ですか」、「14.あなたは今の生活に満足していますか」等の項目から成り、年を取ることや人生に対する評価を示す内容である。

②[心理的安定]は「15.あなたはものごとを深刻に考える方ですか」、「11.あなたは心配だったり気になったりして、眠れないことがありますか」等の項目を含み、現在抑うつ感が低く情緒的に安定した状態を表す。下位尺度間に有意な相関が認められた(Pearsonの相関係数 $r=.28$, $p.<.001$)。

2) PGCモラル・スケール高低群による比較

次に、下位尺度の合計得点をPGCモラル・スケール得点として、その中央値でPGC高得点群と低得点群に二分し、PGC得点群による χ^2 検定を行った(表7)。その結果、有意差の見られた項目は、「1.わたしのからだは」($\chi^2=11.34$, $df=2$, $p.<.01$)、「2.友だちづきあいは」($\chi^2=7.30$, $df=2$, $p.<.05$)、「4.私の人生で、結婚は」($\chi^2=7.75$, $df=2$, $p.<.05$)、「7.年をとるにつれて」($\chi^2=14.09$, $df=2$, $p.<.001$)、「13.私は社会の中で」($\chi^2=9.23$, $df=2$, $p.<.01$)、「17.歴史の中で、私の人生は」($\chi^2=16.67$, $df=2$, $p.<.001$)、「18.私は死を考えると」($\chi^2=8.28$, $df=2$, $p.<.05$)、であった。傾向差の見られた項目は「8. 65歳をすぎたら」($\chi^2=5.08$, $df=2$, $p.<.1$)、「19.私の夫(妻)は」($\chi^2=5.74$, $df=2$, $p.<.1$)、「22.私の人生で、仕事は」($\chi^2=5.40$, $df=2$, $p.<.1$)であった。

IV 考 察

1. 在宅高齢者の心理社会的発達

1) 年代による特徴

年齢の中央値で二分した60歳代と70歳以上で比較したところ、①人生に対する態度において、「22.私の人生で仕事は」で、70歳以上で60歳代よりも肯定的な回答が多かった。60歳代では“仕事は生活の糧”（“は回答例を示す）という中立的な回答が多く、職業生活の評価を保留する者が見られた。Atchley (1985)²⁷⁾は退職前後の変化について、退職以前、ハネムーン、鎮静期、魔術からの解放期、再方向づけ、日常生活のマンネリ化、活動の全体的低下という7つの位相に分類した。これは退職前に退職後の生活について空想や準備をすることから、実際に退職を迎えて喜びとくつろぎの時期を経て、虚脱感の経験から生活を再構成した後、健康の衰え等により活動が低下する過程である。60歳代は定年退職に対する適応のプロセスにあり、人生における職業生活の意味づけは今後の課題であると推測される。

2) 性別による特徴

①人生に対する態度で、「4.私の人生で、結婚は」、「19.私の夫（妻）は」において、有意に男性は肯定的な回答が女性に比して多く、女性は中立的な回答が目立った。これは、⑦社会への関与における「2.友だちづきあいは」とも関連すると思われる。友人関係の評価は、女性は男性より有意に肯定的な者が多く、否定的な者が少なかった。

杉井・本村(1992)²⁸⁾は、老年期のソーシャル・サポートを必要とする問題領域を身辺介護領域、情緒的問題領域、経済的問題に分け、サポート・ネットワークについて性別による比較を行った。その結果、男性は身辺介護領域と情緒的問題領域で、女性に比して有意に配偶者依存度が高かった。一方、女性は身辺介護領域と情緒的問題領域で男性に比して有意に、ネットワークにおける親族資源数が多かった。さらに女性では情緒的問題領域において男性よりも有意に、友人・隣人資源数も多かった。ここから、男性は配偶者に重点化し固定化されたネットワーク構造をもつものに対して、女性はサポートの領域に応じて、配偶者、親族、友人、隣人などを含めた柔軟なネットワーク構造を形成していると結論づけている。

男性は、定年退職後の対人関係を再構成する途上にあるため配偶者に依存する傾向が強く、女性は成人期から形成したネットワークで友人や子どもにも援助を求めることができると考えられる。こうした、成人期からのライフ・スタイルやサポート・ネットワークから、男性は結婚生活や配偶者への評価が肯定的な者が多く、一方で女性は結婚生活の肯定的側面も否定的側面も捉えた現実的な見方であると思われる。

次に、③時間的展望における項目「20.よく思い出すのは」で、女性が男性に比して有意に肯定的な回答が多かった。これは過去を想起して回答するものであるが、女性では、幼少期、学生時代、過去の仕事等に関する肯定的な回答が見られた。男性では戦争経験を挙げる者が多く、否定的な過去の回顧がうかがえた。

3) 総合的検討

ここでは、老年期の心理社会的発達における関連概念について、項目の内容分析から総合的に考察する。

①人生に対する態度では、項目「5.一生をふりかえると」を見ると、肯定的態度では“私として生まれ合わせたことをいつも喜んでいますが”といった自己受容とともに、実績への満足感をもっている。否定的態度では“やり直しができるものなら1から出直したい”という後悔や焦りがうかがえる。また、中立的、両価的评价が多く、高齢者が人生の成功にも失敗にも開かれた姿勢であることがうかがえる。

②死に対する態度では、「18.私は死を考えると」で“幸せな人生だからいつ死んでもよい”という積極的受容や、“仕方がない”という消極的受容とともに、余生の大切さを再認識するなど、死によって生をより豊かにする姿勢が見られる。否定的態度では“前途は真っ暗闇になります”等の悲観的な意味づけの他、“今は考えたくない”という回避、否定、恐怖等が強い。河合・下仲・中里(1996)²⁹⁾は、日本の高齢者は死そのものより死ぬ際の苦しみに対する恐怖が高く、死後を積極的に評価するよりも、現世からの回避より死を受容する傾向を指摘した。死の訪れに予測や統制が不可能なことの苛立ちや、死後の家族や社会への不安が高く、死の受容は困難な課題であると言える。

③時間的展望では、「7.年をとるにつれて」で精神的、身体的老化や限界感の一方で、“迷いがなくなって、多くのことを受容できるようになった”という性格の変化や、“自分の思うように生きられるようにな

りました”といった生き方の再考等で、加齢に伴う肯定的な側面を見出している。

本研究の対象者は明治末期から昭和初期の生まれであり、第二次世界大戦を経て日本の戦後復興を支えた人々である。昭和末期から平成期にかけての経済的に豊かな社会を迎えるまで、社会の混乱の中で仕事や家庭のために働き、自己犠牲的に生きてきた人も多い。定年退職や子どもの独立を経て、ようやく老年期に自己の欲求に気づいたり、戦争のため青年時代に断念したことを生涯学習で実現しようと試みる人もある。彼らにとって老年期は老化という現実と直面しつつも、人格の成熟や新しい生活への機会とも捉えられると言える。

④ 世代性では、「14.子どもや若い人を育てることは」で養育の重要性や社会的継承の認識がうかがえた。田畑・星野・佐藤・坪井・橋本・遠藤(1996)³⁰⁾は、青年期における孫・祖父母関係評価尺度を新たに作成し、両者の関係で相互に時間的展望や世代継承性を促進する機能をもつことを明らかにした。青年期の孫と祖父母がかかわることによって、お互いに人生や死について考える機会をもったり、世代間のつながりを感じることができるという。本研究のSCT-Eからも高齢者の世代性の認識を把握できた。一方、次世代の養成について、否定的評価や時代の相違による世代間ギャップを挙げる者も見られた。

⑤ 知恵では「10.私の人生観は」を見ると、“努力、公平、希望、奉仕、対人関係の協調”等が挙げられた。この他、老後に子どもに依存しないという自立の主張も散見された。しかし、人生観について考えなかったり、未だ見つからないと回答した者も見られた。

⑥ 信仰では、「25.私にとって、宗教は」を見ると、宗教が心理的支えや安らぎ・安心感になっており、人間的な成長を見出す者もあった。逆に関心の希薄さや不信も散見された。また、中立的回答では先祖供養や冠婚葬祭として宗教を捉える者もあった。宗教の教義から理解し日常的に信仰活動を行うよりも、先祖から伝わり家を守るものとして機能する日本的な特質があると推測される。

⑦ 社会への関与では、「13.私は社会の中で」を見ると、“何かを貢献できる人間として余生を送りたい”、“弱者の支えとなり、できるだけ社会奉仕に心がけたい”“というような、社会参加や奉仕に対する関心が高

い。本対象者は生涯教育機関で学ぶと同時に、老人会役員等それぞれの地域で中心的役割も担う者が少なくない。地方都市部の60歳から70歳代、80歳代前半の高齢者で、自ら生涯教育機関を訪れる者は、退職し子どもが巣立った後も社会的に引退せず、地域社会で役割をもち効力感を得るとともに、その資源を他者に還元したいという願望が強い。一方で、自分は役に立たないという否定的態度の者もあり、今後は高齢者個人のニーズに応じた社会への関与が可能なことが求められる。

⑧ 身体意識では、「1.わたしのからだは」を見ると健康な者が多く、若さをアピールし誇りを示す者も散見された。一方病氣・けがや老化を訴える者もあった。

2. 老年期の心理社会的発達と心理的適応

人生と死の受容には、現在の心理的適応が関与することを検証するために、心理的適応の指標としてPGCモラル・スケールで測定される主観的幸福感を取り上げて、SCT-Eとの関連を分析した。

① 人生に対する態度では、「4.私の人生で、結婚は」で主観的幸福感の高い者が低い者よりも有意に肯定的な評価が多かった。星野・山田・遠藤・名倉(1996)³¹⁾は高齢者のQuality of Lifeを評価する尺度を作成し、心理的満足度の関連要因を明らかにした。施設入所者では人生の受容に興味の有無、家族関係満足度が有意な相関を示し、社会への関与とともに、配偶者や家族に対する主観的な満足感が重要であると言える。

② 死に対する態度では、「18.私は死を考えると」で主観的幸福感の高い者は有意に死に対する否定的態度が少なかった。①人生に対する態度において「5.一生をふりかえると」では有意差はなく、むしろ②死に対する態度で有意差が認められた。本研究では死の評価の方が主観的幸福感と密接な関連を示した。

③ 時間的展望では、項目「7.年をとるにつれて」で主観的幸福感の高い者は有意に肯定的な回答が多く、否定的な回答が少なかった。現在心理的適応の高い者は、過去から現在、未来への加齢に伴う変化について、積極的に意味づけていると考えられる。

④ 世代性では、「17.歴史の中で、私の人生は」で主観的幸福感の低い者は否定的回答が多かった。老年期の心理的適応には、自己を“大事な細胞の1つである”というように歴史における位置づけを認識するとともに、“重要な役割を果たした”“社会の進展に貢献し

たと思う”といった充実感や達成感をもつことが重要であると見なされる。しかし、主観的幸福感の低い者はそうした意識が希薄であると考えられる。

⑦社会への関与では、「2.友だちづきあいは」及び「13.私は社会の中で」で、主観的幸福感の高い者は友人関係や社会に対する定位が肯定的な者が多く、否定的な者が少なかった。岡本(1995)²⁹⁾は、友人関係や社会生活に対する満足度の高い高齢者は精神的充足感が高いことを見出し、本研究でも同様の結果が得られた。

⑧身体意識では、「1.わたしのからだは」で主観的幸福感の高い者は肯定的な回答が多く、否定的な回答が少なかった。星野・山田・遠藤・名倉(1996)³¹⁾は、心理的満足度の中でも特に精神的安定に罹病数が寄与することを指摘した。短期的な心理的適応には、身体状態が影響しやすいと考えられる。なお、⑤知恵、⑥信仰ではPGCモラル・スケール得点の高低群による比較において、有意差の見られた項目はなかった。

Wood & Witte(1981)³²⁾は、老年期の心理社会的発達である「統合 対 絶望」について、尺度間の関係から検討した。「統合」の測度としてLSI-A (Neugarten, Havighurst, & Tobin, 1961)³⁴⁾、「絶望」の測度としてDeath Anxiety Scale (Templer, 1970:DAS)³³⁾、過去の心理社会発達課題の測度としてEgo Identity Scale(Rasmussen, 1964:EIS)³⁴⁾を用いた。その結果、LSI-AとEISは男女ともに有意な正の相関があったが、DASとLSI-A、DASとEISでは男性のみで有意な負の相関が見られた。人生と死の受容は並行して進行するものでなく、様々なプロセスがあると考えられる。今後は、個人内傾向を分析し、老年期の心理社会的発達過程の多様性を捉えることが必要である。

〔付 記〕

本研究は日本心理学会第60回大会における発表(1996)を加筆、修正したものである。本論文に際して貴重なご助言を賜りました田畑治教授、梶田正巳教授、村上隆教授(以上、名古屋大学教育学部)に厚く感謝致します。また、SCTの評定にお力添えを頂いた茂木七香氏(名古屋大学医学研究科)にお礼申し上げます。最後になりましたが、調査にご協力頂いた対象者の皆様及び名古屋市高年大学鯉城学園、名古屋市生涯教育

センターの先生方に深く謝意を表します。

〔引用文献〕

- 1) Erikson, E.H.: *Childhood and society*, New York: W.W.Norton & Company, 1950, 仁科弥生 訳, 幼児期と社会 1, 2, みすず書房, 東京, 1977, 1980.
- 2) Erikson, E.H.: *Psychological Issues: Identity and life cycle*, New York: International Universities Press, 1959, 小此木啓吾 訳, 自我同一性—アイデンティティとライフ・サイクル—, 誠信書房, 東京, 1973.
- 3) Erikson, E.H.: *Insight and responsibility*, New York: W.W.Norton & Company, 1964, 鑪幹八郎 訳, 洞察と責任, 誠信書房, 東京, 1971.
- 4) Erikson, E.H.: *The life cycle completed: A review*, New York: W.W.Norton & Company, 1982, 村瀬孝雄・近藤邦夫 訳, ライフサイクル, その完結, みすず書房, 東京, 1989.
- 5) Erikson, E.H., Erikson, J.M., & Kivnick, H. Q.: *Vital involvement in old age*, New York: W. W. Norton & Company, 1986, 朝長正徳・朝長梨枝子 訳, 老年期—生き生きしたかかわりあい—, みすず書房, 東京, 1990.
- 6) Bühler, C.: *The course of human life as a psychological problem*, *Human Development*, 11, 184-200, 1968.
- 7) Jung, C. G.: *The stages of life*, *Collected Works Vol.8, The structure and dynamics of the psyche*, second edition, New York: Pantheon Books Inc. P.387-403, 1969.
- 8) Gould, R.L.: *The phases of adult life: A study in developmental psychology*, *American Journal of Psychiatry*, 129, 48-58, 1972.
- 9) Levinson, D.J.: *The seasons of a man's life*, New York: Alfred A. Knopf, 1978, 南博 訳, 人生の四季—中年をいかに生きるか—, 講談社, 東京, 1980.
- 10) Neugarten, B.L.: *The awareness of middle age*, In Neugarten, B.L. (Ed.), *Middle age and aging*, Chicago: The University of Chicago Press, P.93

- 98, 1968.
- 11) Calson, C.M. : Reminiscing : Toward achieving ego integrity in old age, *The Journal of Contemporary Social Casework*, 62(2), 81-89, 1984.
 - 12) Santrock, J.W. : Adult development and aging, Dubuque, I. A. : W.C. Brown Publishers, P. 345-405, 1985, 今泉信人・南博文(編訳), 成人発達とエイジング, 北大路書房, 京都, 1992.
 - 13) 岡本祐子 : 中年期の自我同一性に関する研究, *教育心理学研究*, 33, 295-306, 1985.
 - 14) 堀内和美 : 中年期女性が報告する自我同一性の変化—専業主婦, 看護婦, 小・中学校教師の比較—, *教育心理学研究*, 41, 11-21, 1993.
 - 15) Domino, G. & Hannah, M.T. : Measuring effective functioning in the elderly: An application of Erikson's theory, *Journal of Personality Assessment*, 53(2), 319-328, 1989.
 - 16) Domino, G. & Affonso, D. D. : A personality measure of Erikson's life stages: The Inventory of Psychosocial Balance, *Journal of Personality Assessment*, 54(3-4), 576-588, 1990.
 - 17) Gough, H.G. : Manual for the California Psychological Inventory: Revision Edition, Palo Alto, California : Consulting Psychological Press, 1960.
 - 18) Beaton, S.R. : Styles of reminiscence and ego development of older women residing longterm care setting, *International Journal of Aging and Human Development*, 32, 53-63, 1991.
 - 19) Fallot, R.D. : The impact on mood of verbal reminiscing in late adulthood, *International Journal of Aging and Human Development*, 10(4), 385-400, 1979-1980.
 - 20) 下仲順子 : 老人と人格, 川島書店, 東京, 1988
 - 21) 岡本祐子・山本多喜司 : 定年退職期の自我同一性に関する研究, *教育心理学研究*, 33, 295-306, 1985.
 - 22) 下仲順子・河合千恵子・中里克治・長田由紀子 : 老年期の心理社会的発達—自我統合と心理的適応—, *日本心理学会第56回大会発表論文集*, 54, 1992.
 - 23) 岡本祐子 : 高齢期の精神的充足感形成に関する研究 (第1報)—高齢者の精神的充足感獲得と生活の満足度および主体的欲求との関連性—, *日本家政学会誌*, 46(10), 923-932, 1995.
 - 24) Neugarten, B.L., Havighurst, R. J., & Tobin, S.S. : The measurement of life satisfaction, *Journal of Gerontology*, 16, 134-143, 1961.
 - 25) Lawton, M. P. : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale: A revision, *Journal of Gerontology*, 33, 85-89, 1975.
 - 26) Gruen, W. : Adult personality : An empirical study of Erikson's theory of ego development, In Neugarten, B.L. (Ed.) *Personality in middle and late life*. New York : Atherton Press, Prentice Hall, 1964.
 - 27) Atchley, R.C. : Social forces and aging, An introduction to social gerontology, fourth edition, Belmont, CA: Wadsworth, 1985.
 - 28) 杉井潤子・本村汎 : 老年期におけるソーシャル・サポート・ネットワークの研究—性別及び役割関与との関連において—, *大阪市立大学生活科学部紀要*, 40, 239-253, 1992.
 - 29) 河合千恵子・下仲順子・中里克治 : 老年期における死に対する態度, *老年社会科学*, 17(2), 107-116, 1996.
 - 30) 田畑治・星野和実・佐藤朗子・坪井さとみ・橋本剛・遠藤英俊 : 青年期における孫・祖父母関係評価尺度の作成, *心理学研究*, 67(5), 375-381, 1996.
 - 31) 星野和実・山田英雄・遠藤英俊・名倉英一 : 高齢者の Quality of Life 評価尺度の予備的検討—心理的満足度を中心として—, *心理学研究*, 67(2), 134-140, 1996.
 - 32) Woods, N. & Witte, K.L. : Life satisfaction, fear of death, and ego identity in elderly adults, *Bulletin of the Psychonomic Society*, 18(4), 165-168, 1981.
 - 33) Templer, D.I. : The construction and validation of a Death Anxiety Scale, *Journal of General Psychology*, 82, 165-177, 1970.
 - 34) Rasmussen, J.E. : Relationship of ego identity to psychosocial effectiveness, *Psychological Reports*, 15, 815-825, 1964.